

最後の「はじめに」 ～退職にあたって～

永田 和宏

2016年に設立されたタンパク質動態研究所も、4年の活動期間を経て、国内外の多くの研究者に知られる存在となってきた。

特に、2018年8月26日～29日の4日間にわたって、比叡山で開催された国際会議「Proteins; from the Cradle to the Grave」（日本学術振興会、新学術領域研究「新生鎖の生物学」との共催）は、国内外からの多くの聴衆を集め、活発な議論が交わされた。その報告が、*Nature Structural and Molecular Biology* 誌 (Vol.25, 996-999, 2018) に写真入りで大きく報じられたことは記憶に新しい。国内の多くの若手研究者に大きな刺激を与えただけでなく、京都産業大学生命科学部の学生、大学院生にも、世界の研究のトップランナーたちと直接話をする機会が持てたことは、大きな収穫であったろうと考えている。

私は、創設時から所長ということで、この研究所とともに歩んできたことになるが、2020年4月をもって退職することになった。京都産業大学に創設された総合生命科学部の学部長として赴任して、ちょうど10年となる。タンパク質動態研究所とはわずか4年のご縁となり、心残りもあるが、今後の発展に期待したいと思う。

最後の年ということも考え、2019年には、アウトリーチ活動の新しい試みとして、「ようこそ、タンパク質の不思議な世界へ」と題した連続講演会を開催した。私自身は、京都産業大学の創設50周年事業として大学から依頼され、2016、2017年の二年にわたって、特別対談シリーズ「マイ・チャレンジ 一步を踏み出せば、何かが始まる！」を主催したことがあった。これは『僕たちが何者でもなかった頃の話をしよう』（文春新書）として、正・続の二冊が刊行され好評であった。

そこで今回も外部から講師をお招きし、その講演のあと、インタビューという形で鼎談を行なうという形をとった。仲野徹（大阪大学）、竹市雅俊（理研）、吉森保（大阪大学）の三先生方の示唆とユーモアに富んだ話を伺うことができ、毎回、多くの聴衆に恵まれて有意義な講演会シリーズとなった。

私がこの欄に「はじめに」を書くのはこれが最後となる。私自身は、この4月からJT生命誌研究館に館長として移動したが、研究に関しては、潮田准教授と共同研究をさせていただいており、まだしばらくサイエンスの世界を楽しみたいと願っているところである。タンパク質動態研究所が、遠藤斗志也新所長のもと、これからもいっそうの研究の発展を内外にアピールしていただくとを祈念している。